

報



會

會 岳 山 本 日

54

月 二 年 一 十 和 昭

立教のヒマラヤ
遠征を聞いて

立教大學山岳部がヒマラヤの一部に遠征隊を出す事が公表された。正に胸をすつとさせるニュースである。併し旺々たる日本の登山界の現狀に鑑み此の報を聞く事寧ろ遅い位の感なきを得ない。

一九二七年の暮、印度に渡つてからの私は、足掛六年間、如何にして吾々がヒマラヤの氷雪に吾等の登山隊を送る事が出来様かと、そのみ考へ抜いて居た。そして私は、遅くも私の印度滞在の中に、その計畫の一部は實行される機会が来るだらうと確信して居た。

私自身の考へでは、カンチユンヂヤンが山群に最も魅力を感じて居た。そして此の方面の情勢を一等力を入れて調べて見た。地理的に言つても、山の大きさから言つても當然大きな登山隊が送られるべき山群であると確信して居た。

果して此の豫感は、獨逸バザリヤ隊の一行に依つて華々しく口火を切られた。そしてかの豪快なる雄峯カンチユンヂヤンが何時も果敢な登攀隊を主峯近く迄も決して近づけなかつた。

苦熱の甲谷陀に、私は只氷雪のヒマラヤを慕ひ乍ら、そして各國からの登山隊の報告に胸を踊らせ乍ら、何時の日かに私達の仲間がゼムの水

河に、或はバルトロの水河に、準備される勢揃ひをする事が出来るのだらうと楽しい想像を追つた。

私は機会ある毎に、母校慶應山岳部の若い人々を通じ、將來第一に知つて置かねばならぬ雪中の露營に關する凡ゆる經驗を得る事を強調した。私の提案は用ゐられて今日猶經驗の上に經驗が重ねられつゝある。そしてこれに關聯してベースキャンブから第二第三と順次高距の天幕に及ぶ方法が大分研究を進められつゝある。

日本には氷河を持つ山岳がない。然し乍ら、冬季に於ける豊富な雪、相當迄下の低い温度等は、凡ゆる意味での好きグレンデを提供して呉れて居る。

私は印度から歸ると間もなく京都大學のヒマラヤ遠征の計畫を聞いたが、これは實現されずに済んで了つた。又、個人的に、ヒマラヤへ向ひ度いと云ふ若い人々の相談を受けた事もある。併し、それも實現されなかつた。

其の間、千島や、朝鮮や、滿洲等への各學校山岳部の遠征隊が派遣された。各々立派な收獲を得て居る様だ。雖しもの胸も、今やヒマラヤへの思ひで膨らみ切つて居る事と信じる。只機會の到來が待たれて居る許りの様に思はれて居た。

こんな時に、立教の今度の企てを聞いたのである。詳しい計畫は聞いてないが、何としても嬉しいニュースである。一人でも多く、假にその麓でも好い、凡ゆる實際のものに接して來て貰ひ度い。百聞は一見に如かぬ。それらの見聞、經驗の集積を待つて始めて大きなものへの挑戦が可能となつて來るのである。

食糧、裝備、運搬人夫の使ひ方、實に色々の研究材料が待つて居る。そして此等の問題も、吾々は既に各國先輩の記録を通して勞せずして多くの材料を知り得て居る。

あとは只、實地に、實際問題が残つて居るのみである。此の點、團體として赴くと云ふ立教の一行に非常の期待を持つ次第である。

夏季に於て、二萬呎を少し出た程のものであれば登頂可能なものは未だ澤山ある筈である。そして、現在の日本の登山術で決して心配はないと信じる。只氣永に、慎重にせねばならぬ事は云ふ迄もない。

欲を言へば、今度の様な隊が毎夏二つや三つ位各學校から出されたならば素晴らしいものである。そして之は決して空想では終らぬ事を信じて止まない。

ヒマラヤは廣い。そして未だ未だ心配する程雄峯は登られては居ない。少しも周章する必要はない。少つくり、經驗を積んで、最後の頂へ向ひ度いものである。

今度の企てを皮切りとして、胸のすく様な計畫が發表されるのもそう遠くはないであらう事を信じつゝ筆を擱く。

(三田)

逝ける文相

松田文相の急逝は直接登山界に影響がある譯ではないが、文相逝くの報を手にして第一に想起したのは次の新聞記事であつた。記事は去る一月十日國民新聞紙上に發表されたもので、時宛も、山岳遭難の報が頻々として新聞紙面に現れ天下を擧げて之遭難の觀があつた當時のことだ。

『學生だつて生命は惜しいから準備は整へて行く筈だ。その上で遭難するのは止むを得ん。冬山に登るなどは心身を鍛練し若い連中の士氣を鼓舞して非常に良いものだ、犠牲の二人や三人出たところで全國に學生は何百萬あると思ふ。そんなことで折角盛んになつた登山熱を挫いたりしちや何にもならん』

松田文相が果してどれ丈け登山界の實情に通じて、冬山に入る精銳の心構えを理解してゐたかは疑問だが學生の山岳遭難防止の目的を以て都下學校責任者の懇談會が開かれたのも、實に、故松田文相の時代であつたことを想ひ合せる時、文相がたゞ壯語を之事として徒らに嘆詞を切つたものでないことは想像される。日本に文相は何十人居たか知らないが、山岳遭難に關し之丈け明確に態度を表明した人は未だ嘗つて居ない。文相を記念する所以である。

(松方)

甘い酒・苦い酒

浦松 佐美太郎

ギード・レイは、さすがに北イタリアの名酒の産地、ビエモンテの住人らしい。彼の著書を読んで行つて御覽なさい。息詰まる様な激しい登攀が始まる前に、山の頂上に、そして山から下つた後に、豊醇なる葡萄酒の香りが、彼の文章の間から、ぶんと鼻を衝いて来る。

歳五十にして、始めてシヤモニーのエキューに登つたレイは、グレボン、シヤルモメ、ルカンの登攀を終へ、コル・デュ・ジエヤンを越へてイタリアへと歸つてゆく。

峠の上にあるイタリア山岳會の小屋、トリノの小屋番を叩き起したの、夜も遅かつた。粗末な木のテーブルの上に並べられたのは、ビエモンテの葡萄酒だ。テーブルを囲んでゐるのは、ギード・レイ、それから、レイが親友から頼まれて連れて来た未だ年若きウィゴ・デ・アミータス、そしてヴァルトウルナンシュの山案内マクイーニヤスが二人である。

レイは、杯を擧げながら、自分の手を眺めてゐる。傷だらけの手だ。その一つ一つの傷が、此の数日間の職を物語つてゐる。グレボンを、シヤルモスを、ルカンを。登山に、古

典派も現代派もない。凡ては歸して一つである、觀じてゐるレイだ。既に、十二分に登山の味を掬し得る達人の域にあるレイだ。自分よりも年若き三人を眺めながら、微笑ましく氣持に誘はれてゐる。

彼は、イタリアの名畫を思ひ浮べてゐる。手は傷付き衣は破れながらも、顔は、殉教の法悦に輝いてゐる、聖者三人を描いた名畫だ。エキューを三つ登り、イタリアの故里へ歸る喜びと満足に、光り輝いてゐる三つの顔が、蠟燭の明に照らされながら、レイの前にある。山の殉教者の顔だ。レイは、さう思ひつゝ杯を擧げてゐた。

モンテ・ローザの東壁、マリネリのクローアールを攀ち登り、ツェルマツトへ下つて来たユリウス・クギーに、ツェルマツトのクラブ室ホテル・モンテローザに陣取つてゐる英國山岳會の面々が、有名なパンチを御馳走して呉れた。コンウエーがゐる。デヴィッドソンがゐる。フィッツツジェラルドがゐる。シイーモア・キングがゐる。クギーは、此のパンチの味を一生忘るゝことが出来ないといふ云つてゐる。その味、その香りは、今もトリ

エストのクギーの室の何處かに、漂つてゐよう。そして、今も恐らく、彼は、心から尊敬してゐた之等の偉大なる登山家を思ひ浮べてゐるであらう。自信を心に抱きながら、彼等は静かに山へと出掛けてゆく、そして仕事を終へてしまふと、また静かに黙つて歸つて行つてしまふと、クギーは之等の登山家を述べてゐるクギーの心の豊かさが忍ばれる言葉である。

ホテル・モンテローザのその楽しい酒宴の夜、クギーは、彼の心に山への情熱の火を點じて呉れた、ウィムバーの姿を探し求めてゐた。併し、ウィムバーの姿は、見えなかつた。クギーは、ウィムバーに會ふ機會を得なかつた。

だが、クギーは、今でもウィムバーの「アルプス登攀記」を愛讀してゐるだらう。山の小説が讀みたいといふて？ それなら、ウィムバーの本を讀みなさい。クギーは、さう答へてゐる。

ウィムバーが、一八六二年の夏、第五回目のマツターホルン登攀に敗れて、山からブルーイユへ下つて来た時だ。宿には、チンダル教授が、ベネンを連れてやつて来てゐる。彼等は、マツターホルン登攀に正に出発しようとして、準備の最中だ。ウィムバーが、あれ程固く約束して置いた、山案内カレルさへもが、チンダル教授の一行に加はつて、準備を手

傳つてゐる。

カレルと共に、折返し、第六回の登攀を試みようとしてゐたウィムバーの計畫は、美事紛糾されてしまつた。翌朝、彼は、チンダル教授一行の出發を、すぐすと見送らなければならなかつた。

淋しくあきらめて、ブルーイユを立ち去らうとする彼が、宿の主人のフアーゲルと一緒に飲んだ、別れの杯は、どんなに苦かつたらう。

×

苦い酒は、レスリー・スチーブンも、屢々経験してゐる。スチーブンは、自分で飲んで苦かつたのではない。人が飲んだ酒の、苦い経験だ。その一つは、彼が、アルプスの名案内中の名案内メルヒョール・アンドレツクと、モンブランに登つた時だ。

スチーブンの一行に、連になつた若い男がゐた。モンブランの長い、膝まで埋ぐる雪の坂道に、此の男がへばつてしまつた。そして、スチーブンの持つてゐるブランデーを、へばる度に無心してゐる。親切な、稀に見る氣立のいいスチーブンは、その度に立ち止まつては、水筒を出し、ブランデーを一口づゝ飲ませてやつてゐる。又、ブランデーを呉れと、スチーブんにせがんでゐる。

水筒を持つてゐたメルヒョールに「メルヒョール、たつた一口だけだよ」と注意してゐる暇に、その若い男は、メルヒョールから、水筒を

取り上げて、あゝ、全部呑み乾してしまつたのだ。

モンブランの雪の上に寝ころがった若い男は「平氣！ 平氣！」を連發してゐる。同情と困惑と、何とも云へない顔をしてゐるのが、人のいいレスリー・スチーブンだ。

そして到頭、此の男を背負つて、シヤモニーへ送り返すことゝなつた無理に割り込まれて斷りも出来ず、そして自分の山登りを臺無しにされても、靜かに見送つてゐるのがレスリー・スチーブンであつた。

×

モンブランは、フランスの山だ。麓のシヤモニーには、ホテル・クイーテがある。

クロード・シユスターを入れて五人が、モンブランから下つて来る。ビエル・ポアンテヌの小屋に下つて来た時は、もう午後の八時であつた。直ぐ下は、森林帯である。麓の町の灯が、もうちらちら見えてゐる。

五人のうちの一人が云ひ出した。「昨日の晩、宿のワイン・リストに、G.H. Mummの×××年の酒があるのを睨んで置いた。もし皆が賛成なら、之から、案内衆に先へ行つて貰つて、クイーテに、酒を氷に入れて置くように頼まう。後から着く時分には、丁度いゝ冷え加減だらう。」

少し小面憎い酒だ。

アイヌのシュトゥとテシマについて

高橋 文太郎

北海道及樺太の舊土人が用ひてゐる雪上滑走具と積雪上の歩行具に就いて述べ、それに關して種々御存知の方から御教示を願ひ度いと思ふ。

取り立てゝ茲に問題にする要もないと思ふが、今回日本青年館郷土資料陳列所主催で開かれた「スキーとカンジキ」資料陳列展に於て計らずも之等の用具を參觀した陸軍被服本廠關係の方からその當事者が聴いた話によると、軍隊(第七師團)が積雪上で此の種のバラシュトゥを履いて歩行の實驗をなした處、軍用の改良輪標などよりも却て適確に使用されさうな暗示を獲たので之から少し此の種の用具の研究をして見たいとの事であつたと云ふ。場所にも依るであらうが改良輪標の缺點を補つて尙且つ便利な點が此の原始的な履物にあるとすれば甚だ面白いことである。

古來その地方に於て發達した用具は矢張りその土地の雪の上に於ては相當な機能發揮するといふ事は一般に認められる點であらう。

我が國(内地)には往古から輪標系統の雪具は極めて廣い地域に各種各様の形態をもつて發達分布して居つたに對し、歐洲の近代型スキーの類似滑走具になると極めて少く、そ

れが多くは實用を離れて大人又は兒童の遊技具としてしか發達しなかつたらしいのは考へる餘地が有りさうである。

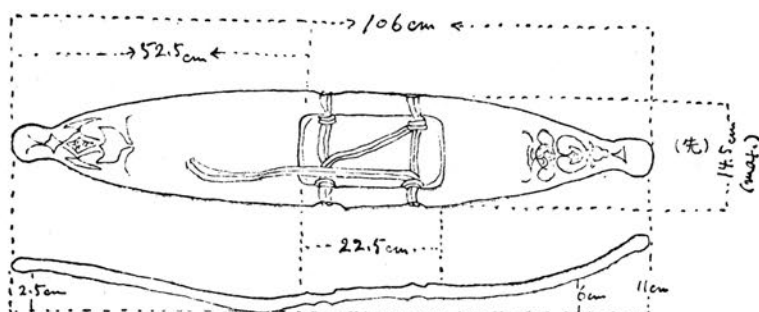
次に北海道及樺太に於て採集又は製作された上記の用具について説明を加へて置くが、何かに關し御示教に預かりたいと思ふ。

(一)A圖は北海道石狩地方で現在極く少數用ひられてゐる型の雪上歩行具で、特に沼や河の横斷に用ひられる。木部裏面には獸皮を張らず足の當る部分がえぐられて紐を張り輪標のやうに作られる。名稱はアイヌによつて、バラシュトゥ (Para-Shutu) と呼ばれ、この Shutu は棒を意味し Para は平たいことを表はすので平棒といふ意になる。使用者は原則として長い一本杖を手に持つ(幌別那登別村出身、知里眞志保氏談)。

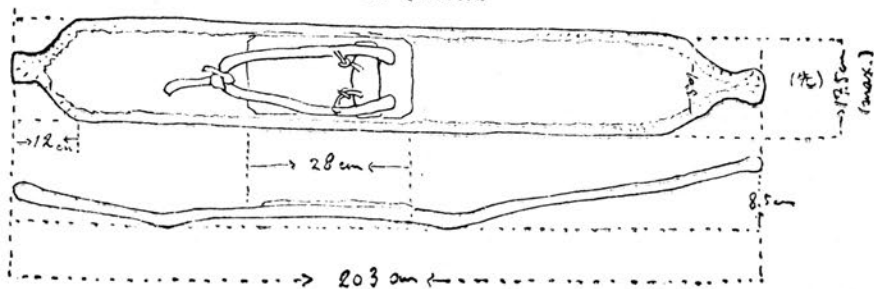
(二)B圖は樺太アイヌの用ひてゐる雪上滑走具でシュトゥ (Shutu) と呼び北海道アイヌの場合とはアセントに於て異なる。木部の裏面には海豹皮 (Seal skin) を張り、之は水面へ蛙の皮を煮て作った油で密着する。この毛は登りの時は後滑りを止め、降りの際には順毛となるから滑走の妨げとならない。主として狩

獵の際又はその他の雪上交通具として使はれ兩杖を用ひる。之に乗る際はケリ(又はキロ)と呼ぶ蛙皮の沓などを多く用ふ。(樺太敷香郡新聞村)

A. Para-Shutu.



B. Shutu



キー型の「木馬」などが餘程之と類似してゐるやうである。
(三)北海道アイヌが用ひてゐる輪標につき記して見ると、特に幌別那

出身、仲川勝蔵氏談。

この滑走具の型は大陸に於ても發見され、支那唐の時代に木馬突厥といふ山間狩獵民が用ひたといふス

登別地方に於てはテシマ (Teshima) がある。内地の楕圓(通例型長徑三二種位)のものより大きく長徑四二—四八種もあり橢圓型を呈して居

る。此のテシマ型は内地では青森縣階上岳附近及び岩手縣遠野地方が南の限界線になつて居り、階上岳附近のものは全くテシマと同型である。
この Teshima はアイヌ語で「反つてゐるもの或は滑る動作」を意味する。之は前輪の先端部で輪を繋いであり且つ底面線よりの高さに於て七—九釐許りの反りを示す。

このテシマに入るものにチンル (Chinru) がある。之は稍々平たい木部をもつて輪を作り前後輪が別々に中央で組合してある。Chin は足、之は道を意味し、即ち二つで「足形」といふ意味にもなる。これ等の輪標をつけて狩獵等に向ふ場合、一本杖をもつ。之をエキムネクウア (Ekimnekuwa) と呼ぶ。Ekimne は「山(狩に行くこと) Kuwa は杖を意味する。杖の長さは一八〇釐以上あり上部に「家印し」等を彫刻する。之には上部が又木になつて居るのがあり、狩獵に出かけることを「マタギに行く」と云つてゐる。これらの杖は山中で熊の穴を發見した時に其處へ挿すと發見者の占有物なる印しとなる。見出した者は杖を先づ立て、それから部落へ人々を頼みに行く習はしがある。

A・B圖標本はアチャク・ミューゼウム收藏。
(知里氏談)

御鷹山のこと

島田 武時

どんな大雪でも、又どんな寒さでも、高山地帯に入らなければ、大抵の場合は軟雪で、軽いスキー登高に恵まれて居ないこの地方で比較的眺望の優れた、又雪質もさまで悪くないこの小さな山の紹介をいたしたいと思ふ。

御鷹山は標高八百七米突餘、富山地方としては数ふるに足りない丘陵でしかないのである。だが、この山の眺望と、快適なスキー滑降とは恐らくこの地方の高山地帯を除いては求められないものがあり、又他地方の丘陵スキー場に比較してさして劣らないものと思はれる。

高山線、八尾驛(陸測五萬分ノ一圖、八尾)から八尾町を経て神通川の上流、室牧川を溯行、二時間半位で御鷹山の山麓、下ノ名温泉に着く、山麓の積雪の少ないときは驛からバスも通ずる。

八尾町は、日本紙の少額の産出と、但し小原節しかない年々衰微する町である。勿論ごく少数の人は、故大島亮吉氏の幼年時代の故郷として知つて居られるかも知れない。

温泉は二軒、室牧川の右岸にあつて、湯は川底の天然岩を割つて作つた湯舟にたゞる半人工的の湯湯である。

大體百人位は宿泊出来る小綺麗なものである。御鷹山はこゝからゆつくり四時間の行程で頂上に達することが出来る。

下ノ名温泉附近の左右の谷は底雪崩の危険がある。それ以外にもこの附近の谷は殆んどこの種、雪崩のあるところらしく、現に今年二月八日の雨九日の快晴にかけて絶へ間もなく打續き、温泉宿はひつきりなしにゆるいだ。遠くのは音も聞へず、夜半の震動に地震かとあやしんだこともあつた。久し振りで冬山に入つた様な気がして愉快だつた。

九日の登高に際しては南向き斜面の多くに底雪崩や、無気味な龜裂や大音響に落ちつゝあるものを認め

た。御鷹山の登路は種々あるが、一番雪崩の少ない安全なものは温泉より直ちに左岸に渡り、足谷の部落に行きつゝ前に室牧川に沿ふ大きな尾根を頂上目指せばよい。こゝより頂上の地形はほぼ管平より猶岳を望んだものに似て居る。

頂上は大きな圓形をなした前山より更に南方にのびた尾根をなして居る。頂上の大観は凄じい位だ。昨秋、角川氏から頼田氏の山麓寫眞行脚の紹介があつたとき即座に浮んだのはこゝだつた。望遠寫眞狂連の至極満足するところと思はれる。

山又山の遙かゝたと云へば、ダーズリンからカンチエの遠望を眞似たと思はれるから止めてたゞ南東北

に連る峯々の名を擧げてのみおかう北アルプス全山を眺めて思ひ出にでもひたりたい人は一度訪れてほしい。

先づ南に笠ヶ岳の全容、奥穂高の頂上、南岳、槍ヶ岳の穂先、續いて黒岳、黒部五郎岳、上ノ岳その背後に赤牛岳一族、更に北方に藥師岳、鳶岳、針ノ木岳、淨土、立山、大日岳、銀岳、毛勝三山、鹿島槍ヶ岳、五龍岳、白馬岳、日本海迄見へるのである。殆んど北アルプスの大物が全部ならべられて居るのである。これだけを眺め得る所はそんなにざらにはあるまいと思ふ。たゞ乗鞍岳が去年の三月も今年の二月も、それらしい尾根が見へるが常に雲をかぶつて頂上が見へるのさうかまだ分らない。

歸途は三十分位で下ノ名宿、更に室牧川の右岸を一時間許り猪峯に登り、上の名、須郷の部落を尾根づたひ滑降すれば素晴らしい林間滑走を三十分味つて八尾町に着ける。

更に又御鷹山より、數納、深道の部落を経て牛岳(九八七米)をトラパスして山田温泉、庄川小牧堰堤に出るコースも面白いものと思はれる。

御鷹山、牛岳と個々には登られてあるがこの二つを結び合はせては開拓してないらしい。それだけの時間があれば皆な高山地帯に行つてしまふからであらう。もう少しこゝいらが歩かれても良いところであるが。

(一九三六・二・一一)

◆會員通信◆

奥又白の冬營

十二月廿五日より上高地に入り
廿七日 奥又白谷大残雪の所までスキーの道をつける。

廿八日 一日スキー練習、吹雪滞在。

廿九日 午後晴、荷物の半分を奥又白の急ルンゼの上り口まで運ぶ、夕刻より気温下る。

卅日 晴、山上は霧、夏路の登りのルンゼを輪カンにて六時

間踏み午後二時池の傍に天幕張る。徳澤に歸る。

卅一日 食料、燃料(石油)を運び上げ野營す、此の日大阪藥

専も登り来り天幕を張る。

一月一日 前穂高登頂、此の日三時間遅れて商大バーテイ北尾根を登る。

一月二日 徳澤下山。

小池 文雄

鹿島 便り

今冬も私達は立教の仲間が最も愛好する鹿島槍ヶ岳へ入りました。もつとも今回は従来と異り、来るべき日の爲めに種々の経験を積むためと器具類の試験を目的としてその舞臺を冬季未踏の天狗尾根に求めたのであります。

良く訓練の積まれた隊員によつて

行はれた極地法は其の効果が絶大であることが、我が國でも既に研究の範圍を越えて發表された証明せられて居りますが、私達も天狗尾根ではこの登山法によつて登りました。その成果とは別に鹿島生活の概略を次に記して見ませう。

十二月廿二日より鹿島造林小舎を根據地として集合し、大川を溯行し、アラ澤出合の左岸より初まる天狗尾根に取りつき、廿四日第一キャンプを一四〇〇米のブナの疎林中に、設け、廿六日第二キャンプを二〇四〇米の細い尾根上に張り、さらに廿九日第三キャンプを天狗の鼻の南鞍部二三四〇米の山稜に進め、準備完了した廿日、攻撃班が第三キャンプより一舉に南嶺に登頂致しました。

此の日は朝は快晴でありましたが風強く、午後からは曇天となり、雪煙の中の九時間のアルバイトでありました。明る廿一日は冬にはめづらしい快晴で私は部員二名と第二キャンプよりのんびりと北嶺を往復、此の日カクネ里の白い園谷に一條の踏跡が続いており、途中より引返した様子でした。北壁は未だ登られ

た様子はありませんでした。キレットの小舎に二名の人影が見え「エホー」を交しました。

以上私達は根據地より南嶺頂上迄僅か一七八九・七米の高度差の所に三つのキャンプ・サイトを設けたので、キャンプ間の距離が餘りにも近く、連絡等には便利過ぎて物たりな

いものがありました。初めて各キャンプを設けた時は新雪深く進行捗らず、精一杯であつた事は事實であります。とまれ私達は充分な時日を豫定し、慎重過ぎる程の準備と豊富な食糧携行によつて、各班安心して登攀の出来た事は成功の一原因とも云へませう。此の登山には器具、食糧等に關して新しい經驗を會得し、又氣の調子等に就ても研究しましたが、こゝでは之等には觸れる事を差控へます。

又天候にも恵まれ十二月二十一日より、全部のキャンプを除去した一月二日に至る間、廿六日が吹雪にあつて滞在した外は曇或は晴天ででした。

次に餘力を生じた私達は一月一日北壁とアラ澤奥壁に二班を出し、アラ澤は唯偵察行に終りましたが北壁は一月元旦午前七時四十分第三キャンプを出發した二名はカクネ里に下り目にトラバースしてアラ澤頭からの壁根の直下から取付いて、悪雪質に強い斜面、凍る岩壁に抗して登攀し上部で右寄りに登高して午後二時東尾根に出ました此の日(一日)も又快晴が續きましたが、夕方から天候がくづれる徴候を示して居ました。果して明くる二日からは本格的な降雪となりました。此の北壁と同時に残る部員は第二キャンプより北館を往復し、全員が館の頂に立ち得たのであります。

私達は今朝、北壁に對しては何等

の準備もしてゐなかつた爲めに、中央部の最も興味深い箇所は割愛しなければならなかつたのは残念でした。三日よりおくられて來られた逸見氏など、二三日間私達は丸山でスキートをたのしみ、晴れた日など鹿島館の雄大な山容を目近く望みながらスキーの出来る丸山は雪がよかつたのでとても面白くこの行を了へることが出来ました。

湯 淺 巖

興安嶺遠征隊から

拜啓愈々御清福奉賀候
陳者今回大興安嶺遠征に就ては種々御後援を蒙り一同元氣に一月月の旅行登山を終へ候次第御厚意感謝の至に不堪候
二月一日歸京致候に付厚く御禮申上
度如斯御座候 敬 具
二月三日

京都帝大大興安嶺遠征隊一同

樺太遠征隊から

(前略)入江隊長以下無事で歸りましたが、遠征中は御心配をおかけした事と思ひます。
五日に池田の官行事務所へ土人をやる様に約束をして出かけたのですが、吹雪の爲め、二日遅れ、敷香の方が随分荒れたので、心配して遭難ではないかと言ふ事になつたとの事でした。地圖を心配して居ましたが樺太廳の方で御厄介になりました都合でした。

樺太廳及び敷香支廳の方々に色々御世話を受けましたり歓迎をして戴いて、全員大喜びを致しました。敷香のオタスの杜のヤクトツ族、ウイノクロフには非常に世話になりました。彼はロシアの宗教大學を卒業したので、學生の氣持は良く解ると言つて、行を共にし色々案内をしてくれたり自分が先になつて、良く働いてくれました。三十一頭の馴鹿をも、二十頭の計算にしてくれ、自分は無報酬で来てくれました。日本人はもつと北の方、シベリアに注目しなければ駄目だと言つて、彼の皇室中心、大亞細亞主義と言ふのを連夜聞かしてくれました。併し彼も土人で、色々の迷信を信じて居る様でした。

トナカイも樺太の山歩きには良いと思ひましたが夜放しますので朝之等を連れて來るのに非常に時間を取りそれが爲め出發が遅れ、大分困られました。

温度は零下四十八度迄下りましたが、夜中でしたので、そんなに感じませんでした。晝は、土人のケリと言つてアザラシとトナカイの毛皮で作つたゴムの長靴の様なものを歩いて歩きましたが行進中は暖かいのですがトナカイの背ではやはり足が冷くて困りました。

兒島先輩も無事歸つて参りました京大の方も二日報告が遅れた爲め、何でも無いのにさわがれた様です。

三 崎 篤

春期臺灣遠征

嚴寒の御貴會益々御隆盛の事と大慶に存じます。

偕て本學山岳部では来る春期休暇を利用してしまして北部臺灣の次高・大霸尖山・南湖大山附近登攀の豫定にて行を起す事となりました。

臺灣選擇の動機は、因より遠征地は貧困より來たる窮餘の一策としてではなく、以前より積雪期の臺灣山岳それ自體に深い興味と憧れを抱いてゐたからであります。

從つて私達の遠征目的は臺灣山岳の爲の臺灣遠征に終始するものでありまして、別に將來來るべきものに對する豫備的試練と云つた考へは事更に持つて居らないのであります。

この意味に於きまして私達は春期の臺灣山岳を悉ゆる角度から殘す所なく觀察し且つ親しんで來ようと思つて居ります。

或はこの行が學術的にも何等か貢獻する處があるかも知れませんが又或うある様に微力乍ら努力して見る考へで居りますが、併し是れは絕對的な目的ではなく私達は何處までも『臺灣遠征』と云ふものを一つの纏つた行動として成就する事が出来ればそれで充分目的は達せられたと考へるものであります。

尙、積雪期に於ける臺灣の山岳が我國の他の何れの地に於ても見ることの出来ぬ熱帯より寒帯への垂直的な氣候分布を示してゐる事實並びに

該地ボーダーが熱帯の蕃人であること云ふこれ等の特殊事情がこの遠征に聊かエキस्पедиシヨンの側面を與へるものではないかと私考するものであります。

何分にも經驗の淺い私達の集りの事として、先輩諸賢に於かせられましても何卒厚き御指導と御鞭撻を賜らん事を偏に御願申上げる次第であります。

尙隊員編成は次記の如くであります。

神戸商業大學臺灣遠征隊
隊長 田 中 薰 山岳部長
副隊長 山 本 明
阿 部 武 道
土 橋 芳 夫
石 田 正 三
奥 田 五 郎
上 條 孫 人
隊 友 足 立 源 一 郎 齋 伯
神戸商業大學山岳部

ガルワル遠征

拜 啓
例年になく寒さで御座いますが皆様には御壯健にて益々御活躍の事と存じます。當部も皆様の日頃の御鞭撻に依り理想への道を邁みつゝある事は部員一同の常に感謝措く能はざる所であります。

さて私達は豫ねてからヒマラヤに於て各種の經驗を得、將來の活躍に備へ度いと存じて居りましたところ、幸にして、今度大阪毎日新聞社東京

日新聞社其他の御後援を得る事が出来まして、今夏東京出發の豫定を立てる運びに至りました。

私達の目的は必ずしも著名高山の登攀ではなくて種々の登高法とか器具、食糧の適否及び人夫の操縦法等の經驗を得る事に重きを置きました結果、行先も簡単に入國出来る Great Inland 地方を選び隊員も約六、七名の極めて小規模な計畫であります。前人未踏の高峻山岳征服こそ我等の理想ではあります。その實行に至つては時期尚早の恨あるを免れません。私達は唯このさやかな計畫が將來、日本山岳界の輝ける飛躍への捨石となり得る事を希ふばかりであります。他の運動競技がオリムピック、ゲームに参加して列國と對等の地位にある如く我國から大規模のヒマラヤ遠征隊を送る日こそ我國山岳界が世界の山岳界に伍する日ではないでせうか。私共はこの日の近からむことをひたすらに祈りつゝ此度の行につくのであります。

昭和十一年二月

立教大學學友會山岳部

敬具

◆新刊紹介◆

岩波文庫『北越雪譜』

越後鹽澤の人鈴木牧之の『北越雪譜』の複製である。『北越雪譜』そのものについては今更ら多言を要しない。併し何と云つても、天保年間に出来たものを手に入れることは決して容易ではないし、又和綴木版のオリジナルは珍蔵するのには適しても、讀むのには決して適して居ると云へない。岩波文庫に收められたものは『北越雪譜』初編上中下の三冊、二編春夏秋冬四冊合計七冊を全部纏めて文庫一冊六十六頁に収録したものである。定價四十錢とあれば値段の上で文句の出る氣遣ひもなし、我々としては何としても活字で印刷してあつた方が有難い。原本同様振假名付で、氣象臺の岡田武松博士の校訂を経て、巻頭には博士の解説を、更に巻末には恐ろしく簡單乍ら同博士の註釋が添附され、牧之翁の木像寫眞も挿入してある。

に珍本だとか、木版刷だとか云ふ特異の感情なしに此の本を受け入れたであらう當時の人々と同じやうに、我々が今、此の岩波文庫の『雪譜』を受取ることの出来ることは取りも直さず、我々と『雪譜』との距離を天保年間のオリジナルの状態に還元したことで、此の意味では複製版の方がオリジナルに近いと云ふことになる譯だ。

岩波文庫にまだいくらもよい古典が収録されてゐることは謂ふ迄もないとしても、『北越雪譜』は我々に因縁が深く、又讀んで甚だ興味の深いものである點で、殊更ら此處に紹介する値打はあると思ふ。『文庫』編輯者が此の種類のものに關心を注いでゐるのは洵に喜ばしい。

然るに云へば挿畫がもう少し明瞭に出てゐたならばといふことだ。原本の版畫が二度刷りで、凸版にすることも出来ず、従つて寫眞版にしたものと考へられる。のみならず、美濃紙判の原畫からすれば大分縮めた譯だから致し方ないとしても、せめて、刷りのよい原畫を選択したならば、もう少しよく出たことは争はれない。

『雪譜』のオリジナルを手にした親しい氣持が、此の複製版の出来で我々にまで復活させられたものであらうが、日向ぼつこでもし乍ら、或は朝夕の電車の中で氣輕に更生の『雪譜』を手にする今日の我々の氣持こそは、天保當時の讀書人のもつた氣持ではなかつたらうか。要する

で求められるのを勤め度。圓タクなら間違へば生命にも係はらうが、『北越雪譜』なら吹雪の恐しい物語などはあるが、生命の心配は要らない。本屋の廻し者見たいな言ひ草になつたが、感想を有りの儘に。

(松方三郎)

「山日記」編輯について

一九三〇年第一回の「山日記」を發行してから今年は丁度第七回になります。今年も一月の理事會で山日記編輯委員を決定し今度は大々的飛躍を試みる意氣を以て既に編輯に着手してあります。

就いては新しい「山日記」に對して改めて會員諸氏の御希望等伺ひ度く切に御助力を御願致す次第であります。特に左の諸項につき御意見等賜はらば幸ひに存じます。

- 1、新項目として如何なる種類のものも希望されるか。
- 2、改訂を要する點に就いて
- 3、山小屋、山案内組合、登山團體について新設されたもの或は昨年度調査に漏れたものにつき、名稱、所在地、問合せ先等

山日記編輯委員

山岳圖書展覽會目錄別冊

定價 並製金五十錢也(送料) 上製金壹圓也(四錢)

「山岳」合本用表紙

- 一、上質バックラム(灰青色)
- 二、背、山岳第何年西曆を押す。
- 三、ビラは兩面に會章を押す。
- 四、前後見返し茨木畫伯筆。
- 五、一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢(送料本會負擔)
- 六、雜誌を本會へ送付される場合、本料共一圓(返送料本會負擔)

「會報」綴込用表紙

- 一、ビラは濃綠色レザー、會章押捺
 - 二、背は濃紺色クロス。
 - 三、代金四十錢(送料本會負擔)
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御手越下さい。

振替口座東京四八二九番



會務報告

二月定例理事會

二月二十日(木曜日)午後六時虎の門本會事務室に於いて開催。

出席者、高頭、木暮、島山、島田、黒田、田口、松方、飯塚、英木、三田、中屋、楳、角田、逸見

協議事項(括弧内は説明者)

- 一、山岳編輯に關する件(黒田)
- 一、山日記編輯に關する件(角田)
- 一、圖書整理に關する件(島田)
- 一、第三回山岳懇談會報告(田口)
- 一、山岳遭難救助機關案懸賞募集願末報告(田口)
- 一、案内人手帳に關する件

新評議員

前理事島山悌成、黒田孝雄兩氏は會則第九條により今回評議員に推薦せられ、本年度より常任評議員として就任に決定せり。

關西支部一月定例理事、委員
會館新舊理事歡送迎晚餐會

一月廿八日午後六時支部ルームに於て開催、出席者別宮、三木、今西、宮崎、西岡、小川、中村、松井、安藤、影山、外に藤木、中原、津田及び足立源一郎の諸氏臨時參加、高橋義理事は風邪のため缺席、當日の決議事項左の如し。

- 一、定例理事委員會ハ毎月第二火曜日午後七時開會トス、但シ祭日又ハ特ニ支障アル場合ハ適宜變更ス
- 一、會報ニ支部報欄ヲ設ケ支部ニ關スル記事ヲ掲載スルヤウ本部ヘ要求スルコト
- 一、支部ルーム維持會員ニ對シテハ維持費使途ニ付半年毎ニ會計報告スルコト

- 一、維持會員氏名及ビ支部ルーム備付品寄贈者並ニルーム開室日ヲ會報ニ掲載スルコト

關西支部ルーム維持會員

昭和十年十二月末現在氏名左の如し
小川正十郎、岡本治之助、大島堅造、朝輝記太留、安藤博、加納一郎、國府精一、須々木勝年、鈴木克英、住澤梅太郎、杉山良平、杉本俊二、田中喜左衛門、高橋勇次郎、高橋佳十郎、竹下英一、武内重雄、田中良太郎、武山良次、津田周二、辻谷幾藏、中川伸直、中原繁之助、中江喬三、西井常造、西岡一雄、服部鎮一、藤井眞太郎、別宮貞俊、藤木九三、松井重和、宮崎武夫、村田數之亮、水野

祥太郎、松井久之助、三木高峯、安井喜之助、山村功、横山治郎吉、若城豐次郎、以上四十名七十九口。

◎支部ルームに對し左記の寄贈を受けたリ、謹で謝意を表す。

圖書 Die Alpen Vol. 1832 一册

中川伸直氏

繪畫 グリンデルワルド寫生畫 一

足立源一郎氏

寫眞 ゴルナーグラート周廻 一

中原繁之助氏

同 北アルプス赤外線寫眞 一

岡野 滋子氏

支部ルーム開室日

毎週火、木、土曜日午後五時より八時迄とし前川書記出勤す。但し會員にして右の開室日及び該時間以外に訪室さるゝ時はルームの隣室好日山莊に御申込あれば何時にても開室す。

二月定例關西支部理事委員會

二月十八日午後七時より支部ルームに於て開會す、出席者 別宮、三木、安藤、西岡、小川、影山、中村、津田、

決議事項

◎第七拾參回小集會開催の件

日時 三月十七日(第二木曜)午後六時半

場所 大阪市北區堂島堂ビル清交社
講演 豫定
濟州島冬季遠征登山、樺太冬季遠征登山、興安嶺冬季遠征登山の話

◎四月上旬關西側評議員今村、加賀、榎谷三氏を中心として山岳座談會並晩餐會を催す件
以上

新着圖書

スキーブック 大熊保夫著

山岳講座 第三卷 共立社書房

地學雜誌、一、二月號

山小屋同朋文藝堂

登山とスキー 同 黎明社

野鳥同 集林書房

寫眞月報 同 小西六本店

ツリースト 一月號

ジャパンツリーストビニロー

ケルン 同 ケルン編輯室

山 同 梓書房

北大山岳部々報五、北大山岳部

針葉樹 八、一橋山岳部

登高行九、慶應義塾山岳部
廣島文理大、廣島高師山岳部報 四

The Geographical Journal Dec.

1935, Jan. 1936

The Prairie Club Bulletin Jan.

1936

Appalachia Jan. 1936

The Mountaineer Jan./Feb.

1936

Natural History Dec. 1935 Jan.

1936

Revue Alpine (Section Lyon-

naise C. A. F.) Hiver 1935-

1936

La Montagne Nov./Dec. 1935

Club Alpen Italiano Nov./Dec.

Die Alpen Dec. 1935 Jan. 1936

Britlei C. E. C. Nov./Dec.

De Bergids Dec. 1935 Jan.

1936

Planinski Vestnik Ste. I Le-

to 1936

S. T. F. Nr. 8 Dec. 1935

Sierra Club Bulletin Dec. 1935

Trail and Timberline Jan. 1936

Mountaineering Journal Dec.

1935

Zeitschrift des D. Ö. A. V.

1935

野田泉光院遺著

日本九峯修業日記 杉田直氏寄贈

會員寄贈圖書

矢嶋祐利譯 チンダル アルプスの

旅より (岩波文庫)

長尾宏也著 山の隣人

以上 黒田 孝雄氏

Images de L'Himalaya (Encyclopedie Alpina illustrée)

以上 藤島 敏男氏

購入圖書

Walzenbach: -Bergfahrten

H. Schneider: -Auf Schi in Japan

陸地測量部發行新刊地圖目錄

四一六、一八、二二二六、二

八一三三、三五、三八、三九、四

一一四三、四六四八

第三回山岳懇談會

今冬行はれた興安嶺、樺太國境山

脈、千島等の遠征の経験を中心とし

て、且又最近内地山岳に於ける登山

の経験を之に加へて、我々の現在

持ち合せてゐる色々の知識を綜合交

換しやうと云ふ目的で第三回懇談會

を開いた。

會の議事は特に登山に於ける裝備

に重點を置き、豫め討議事項を左の

如く決定し、討議の輪廓を明にした

一、裝備(天幕、寝具、暖房及炊

事、服裝特にウインドヤッケ、毛

皮、靴、オーグアーシューズ、燈

火及燃料、登山具、觀測器具)

二、食糧(主食物、乾燥食糧、土人

及人夫の食糧、嗜好品)

三、輸送(包裝及區分、其他)

四、返信及相互聯絡(返信方法及器

具、各天幕間の相互聯絡)

五、所謂「遠征」について(登山の

形式特に「極地法」、隊長及隊員

の問題、人夫、費用、外部との關

係、遠征報告)

會は先づ例の如く晚餐會から始り

京都から迎へた京大遠征隊々長加藤

泰安氏同じく同大遠征隊々長入江保

太氏を中心に京大の兒島勘次氏をも

加へて一同食事を共にし、從つて、午

後六時半から懇談會に入つた。先づ

◆事務所から◆

□住所の變更は御通知下さい。

□會費お拂ひ込み未済の方はなるべく早く願ひます。

□會員通信は事務室内會報掛宛に願ひます

虎の門の事務所は戒嚴令下に一時
立退を命ぜられたりする程、事變の
中心に近かつたのですが、幸ひ何事
もなく無事でありました、色々御心
配下さつた地方の會員の方々に御禮
を申上ます。

◆編輯室から◆

會報も此の次は大いに政界の刷新
と相呼應する覺悟であります。

會報附録として山岳遭難救助機關
案入選案の印刷を御送りします。

全般投稿規定

◆原稿は山岳に關する研究、隨筆、
紀行、消息の類に限りります。

◆原稿締切 毎月五日

◆原稿用紙は十六字詰のこと

用紙御希望の方には會から御送り
します。

◆原稿は特に御希望なき限り一切返
却致しません。

◆原稿の取捨は會報編輯係に御委せ
下さい。その他編輯上の一切の事
項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十一年二月廿五日印刷
昭和十一年二月廿九日發行

編輯者 松方 三郎

編輯委員 逸見 眞雄

印刷所 東京市小石川區戸崎町一三

印刷所 多木印刷所

發行所 東京市芝區琴平町一六二(二層ビル)

日本山岳會

電話 五六一六四九番

廣告一手取扱

電話 四六六五四番

ケルン

山とスキーの月刊雜誌
一部二十五錢・年三圓

編輯は一に向上と前進を望む同好者を目標に、常に経験に富んだ登山家のルツクのやうに精選された内容をもつて張りきつてゐる。餘剩部数を刷らないから書店か發行所(大阪市北區堂島上通二丁目大阪府番ビル・ケルン編輯室・振替大阪一七〇七五番)へ申込んでおかぬと手に入らぬことがあるかも知れない。